

駿河台大学資格課程年報

*Surugadai University
qualification course annual report*

司 書 課 程
学 芸 員 課 程

No.24
(2023)

ごあいさつ

駿河台大学資格課程 主任 村越 一哲

『駿河台大学資格課程年報』第24号をお届けいたします。

1994年3月に駿河台大学文化情報学部が創設され、1995年4月に、文化情報学部資格課程(司書課程・学芸員課程)が設置されました。開設7年目の2001年に『駿河台大学資格課程年報』創刊号を刊行しました。そして、その後も継続して年報を刊行し、今年度も無事に第24号を刊行することとなりました。

司書課程においては、文字情報だけでなく、映像や音響も含めた多様な情報に対する理解や対処ができる、まさに情報の専門職の役割を果たす司書を養成しています。

学芸員課程においては、博物館資料の展示・教育活動等の情報社会における意義・役割を重視したカリキュラムを設置し、資料情報のデータベース化やインターネット上での公開などの情報処理技術を身につけた新しい学芸員の養成をめざしています。

文化情報学部が2009年度にメディア情報学部へ改組されその後、駿河台大学資格課程は同学部に設置されるようになりました。資格課程にはメディア情報学部のほか、法学部・経済経営学部・現代文化学部・スポーツ科学部・心理学部の学生も登録することができます。2013年度からは、図書館法および博物館法の改正に伴い、それに沿った新しいカリキュラムが開始されています。

現在、多くの授業が対面に戻りましたが、新型コロナウイルス感染症の拡大も無く、無事1年間を終えることができました。ご協力いただいた皆様に御礼申し上げます。

また本学では、学外実習が始まった当初から教員がそれぞれの実習館を訪問し、実習生を受け入れてくださっている博物館とのコミュニケーションを図ってまいりました。今年度も本学の実習生を受け入れていただき、ご理解・ご協力いただいた館園には、厚く御礼申し上げます。この年報を通して本学の資格課程カリキュラムの内容をご確認いただけましたら幸いです。

= 目 次 =

ごあいさつ	村越 一哲
I. 司書課程	
駿河台大学 司書課程について	石川 賀一 …………… 6
II. 学芸員課程	
駿河台大学 学芸員課程について	村越 一哲 ……………10
実習館訪問記：（「高崎市歴史民俗資料館」訪問報告）	間島 貞幸 ……………13
《博物館実習 体験記録》	
博物館実習を終わって－課題レポートから－	博物館実習生 ……………15
資 料	
博物館実習協力館一覧（過去3年分） 2021年度、2022年度、2023年度	
2023年度資格課程（司書課程・学芸員課程）修了者	
司書課程科目担当教員一覧	
学芸員課程科目担当教員一覧	

I . 司書課程

駿河台大学 司書課程について

メディア情報学部 講師 石川 賀一

司書課程の特色

駿河台大学では1994年文化情報学部創設の翌年に資格課程として司書課程と学芸員課程を設置し、2022年度までに1,628名の資格取得者を輩出している。2001年度より資格課程は全学に開かれ、他学部の学生も履修できるようになった。

2009年に文化情報学部はメディア情報学部改編された。メディア情報学部は、3分野・7つのモジュールで構成されており、様々なメディアの本質を理解し、各種メディアに精通し、多元的メディア社会に即戦力となる人材の育成を目標としている。

司書が専門的な業務に従事する図書館には、公共図書館・学校図書館・大学図書館に加えて、企業等に設置されている専門図書館や情報センターがあり、それぞれの利用者のニーズに応じて様々な情報サービスを提供している。駿河台大学の司書課程では、メディアと情報資源に関する全般的な学びをベースに資格取得を目指すことから、図書館はもちろん、広い分野において、多様な情報資源を活用し様々な課題解決を支援することができる人材の育成に努めている。そのため、司書科目だけでなく、受講生自身が自分の強みとしたい分野の科目についても、積極的に履修することを勧めている。

司書課程4年間の流れ

司書課程科目は1年次から開講されている。資格取得には、4年次までに「司書課程科目」で定められた科目を計画的に履修し、単位を修得することが求められる。ここでは2021年度以降の入学生を例に、4年間の履修の流れを紹介する。(司書課程科目一覧を参照)

1年次： 入学してすぐに資格課程登録ガイダンスを受講し、期日までに『資格課程受講登録』を申請する。1年次から開講される「図書館情報学」、「図書館サービス概論」、「図書館情報資源概論」の必修3科目を履修し、単位を修得する。

2年次： 2年次から開講される「生涯学習論」、「図書館情報技術論」、「情報サービス論」、「情報資源組織論」、「児童サービス論」の必修5科目を履修し、単位を修得する。選択科目も適宜履修し、単位を修得する。

3・4年次： 3年次から開講される「図書館制度・経営論」ならびに演習科目である「情報資源組織基礎演習」「情報サービス基礎演習」の必修3科目を履修し、単位を修得する。また選択科目を適宜履修し、司書資格取得に必要な単位（必修22単位を含む26単位以上）を満たす。

司書課程科目一覧（2021年度以降入学生適用）

区分	図書館法施行規則によって定められている科目	単位	本学における科目	単位	配当年次	必要単位数	
必修科目	甲群	生涯学習概論	2	生涯学習論	2	2	11科目 22単位 必修
		図書館概論	2	図書館情報学	2	1	
		図書館制度・経営論	2	図書館制度・経営論	2	3・4	
		図書館情報技術論	2	図書館情報技術論	2	2	
		図書館サービス概論	2	図書館サービス概論	2	1	
		情報サービス論	2	情報サービス論	2	2	
		情報サービス演習	2	情報サービス基礎演習	2	3・4	
		図書館情報資源概論	2	図書館情報資源概論	2	1	
		情報資源組織論	2	情報資源組織論	2	2	
		情報資源組織演習	2	情報資源組織基礎演習	2	3・4	
		児童サービス論	2	児童サービス論	2	2	
選択科目	乙群	図書館情報資源特論	1	情報資源組織発展演習	2	3・4	2科目 4単位 以上
				デジタル・アーカイブズ論	2	3・4	
				歴史資料論	2	3・4	
		図書館サービス特論	1	コミュニケーション論	2	2・3	
				情報サービス発展演習	2	3・4	
		図書館基礎特論	1	情報処理概論	2	1	
		図書館総合演習	1	図書館総合演習	2	3・4	

II. 学芸員課程

駿河台大学 学芸員課程について

メディア情報学部 教授 村越 一哲

学芸員課程の目標と経過

駿河台大学の学芸員課程は、メディア情報学部設置されている。これまでメディア情報学部では教育目標の一つとして、「情報メディアエーター」の養成を挙げてきた。「情報メディアエーター」とは、人間の文化的営みに関する諸々の資料などに関する専門的知識を持つとともに、これらの資料情報をシステム化し、データベース化するための情報処理技術を身につけ、これらの資料に関する要求に対して適切な情報提供の仲介を行う専門家のことである。文化資料の宝庫とも言える博物館の「情報メディアエーター」とは、その能力をもつ博物館学芸員を意味する。

この目標を達成するため、メディア情報学部の前進である文化情報学部のカリキュラムには、学部設置当初から博物館関係の科目が設けられた。1995年、博物館法施行規則にもとづく学芸員資格取得のための必要科目も開設された。また同年、学芸員課程と司書課程を合わせた「文化情報学部資格課程」が設置され、専門的知識と情報処理技術を身に付けた学芸員の養成が本格的に開始された。

その後、1996年の博物館施行規則改正に伴い、1997年度から必修科目が開講されている。2001年度には、他学部の学生や学外の科目等履修生も学芸員の資格取得を目指せるように、学則および科目の一部を改正した。資格課程も学部規模から大学規模に拡大され、現在は全学部からの委員で構成される「資格課程委員会」がその運営にあっている。

学芸員課程の履修科目

1995年の開講時には、必修科目として6科目14単位、選択科目では12科目の中から4科目8単位以上、人文・自然科学系科目として10科目の中から3科目6単位以上の履修が資格取得に必要なように設定された。

1996年度の博物館法施行規則の改正にともなって、必修科目に「生涯学習概論」、「博物館概論」を追加し、必要単位数を8科目18単位とした。さらに、2001年度から、文化情報学部のカリキュラムの一部改正、ならびに資格課程を本学の他学部、科目等履修生に開講したことにもない、一部科目の新設ならびに入れ替えを行って、学芸員資格取得に必要な科目を加え改正した。

主な変更点は、次の通りである。必修科目では「博物館資料論」を設け、選択科目では科目を一部入れ替えるとともに、他学部開放にともない人文・自然科学系科目をA、Bの二つに分け、それぞれⅡ群、Ⅲ群とした。履修方法は、Ⅰ群は、受講者全員が履修することとし、Ⅱ群、Ⅲ群の科目からは2科目4単位以上を自由選択により修得しなければならないことにした。また、「博物館実習」は、年間を通して大学で行う学内実習と博物館などの現場施設で行う学外実習を合せて実施している。

2013年度からは博物館施行規則改正に伴う新科目の開設を行い、2017年度からは、配当年次、選択科目の見直し等を行い、資格を取得し易くした。2021年度からは全学の教養科目の見直しに伴って人文・自然科学系系科目を見直し、別表1のカリキュラムでの学芸員養成を開始している。

履修登録および博物館実習への対応

学芸員課程の履修については、毎年、「資格課程履修ガイド」を発行し、学生に配布して周知を図っている。これに基づく年間スケジュールでは、まず、毎年4月、1年次生および3年次編入生を迎えた段階で、司書課程と合同で「資格課程登録ガイダンス」を行い、その後、学芸員課程の履修を希望する学生は、登録期間内に本学の所定の方法にしたがって教務課窓口で登録することになっている。

博物館実習については、3年次生を対象に、毎年11月中旬に第1回のガイダンスを行い、博物館実習の実施内容や実施上の注意事項を改めて説明している。そのとき、実習館園に関するアンケート調査を行い、その後のガイダンスで担当教員と学生が相談しつつ実習希望館園を絞り、適時学生自身に申し込みをさせている。その後も、申し込みの状況や途中経過などを確かめ、およそ3月～4月末までに学生各自の実習館の内諾をいただけるようにしている。内諾をいただいた実習予定館園に、正式に文書で依頼している。

実習直前には、実習予定学生に対して「実習直前ガイダンス」を行っている。ここでは、博物館実習は、実習実施に当たっての諸注意や期間中の連絡体制等を説明し、実習日誌などを配布して、実習の心構えと準備を整えさせている。博物館実習の授業内では、実習に対する心構え、事前準備などの事前指導を行っている。実習が始まると、担当教員ができるだけ実習期間中に各実習館園に挨拶に伺って、実習状況の確認と実習学生の激励を行い、以後の学生受入についてお願いしている。また、実習終了後には事後指導を行い、学芸員の職務を再確認させ、学芸員になるための一層の努力を促している。なお、資格課程に関わる一連の事務は、メディア情報学部担当の教務課職員に担われている。

学芸員資格課程の今後

1997年度に初めて、本学の学芸員資格課程で86名が学芸員の資格を取得したが、2013年度の法改正後は5～6名の学生が資格を取得している。ここ数年は10名程度と微増傾向にあるが、これまで博物館に就職した者は数名にすぎない。学芸員募集には、募集分野の細分化や高学歴化の傾向、施設運営の指定管理制度導入の影響が見られ、資格を持ちながらそれを活かす職に就けない状況が続いている。これは本学資格課程だけの問題ではなく、学芸員課程を開設している日本全国の大学に共通な問題である。

一方、学芸員資格は国家資格であるため、これを取得したことを重視して採用を行ってくれる企業も、多くはないものの存在する。そこで本学では、博物館実習を一種のインターンシップの場としても捉えている。幸い、実習博物館でも、実習学生の受け入れを社会教育施設の業務の一つであると解して協力してくれるところもあり、今後大学と博物館とのさらなる連携を推進して行く必要がある。

2022年4月に博物館法が改正となり、目的に「文化芸術基本法に基づくこと」、「博物館資料のデジタル・アーカイブ化」が追加された。他の博物館との連携、地域の多様な主体との連携・協力による文化観光など地域の活力の向上への寄与が努力義務化にもなった。このような変化に対応するためにも、カリキュラム・教授内容を再検討して社会が必要とする学芸員の養成を行っていく必要がある。

別表1 学芸員課程科目（2021年度以降入学生適用）

区分	博物館法施行規則によって定められている科目等	単位	本学における科目	単位	配当年次	必要単位数
必修科目	生涯学習概論	2	生涯学習論 ※1	2	2	10科目 20単位 必修
	博物館概論	2	博物館概論	2	1	
	博物館経営論	2	博物館経営論	2	2	
	博物館資料論	2	博物館資料論	2	2	
	博物館資料保存論	2	博物館資料保存論	2	3 4	
	博物館展示論	2	博物館展示論	2	2	
	博物館教育論	2	博物館教育論	2	2	
	博物館情報・メディア論	2	博物館情報・メディア論	2	3 4	
	博物館実習	3	博物館実習Ⅰ	2	4	
			博物館実習Ⅱ	2	4	
資料・情報管理系科目		マルチメディア論	2	1	8単位 以上 選択	
		アーカイブズ学	2	3 4		
		音響メディア論	2	2		
		データベース設計論	2	3 4		
		ネットワーク構築論	2	3 4		
		デジタル・アーカイブズ論	2	3 4		
選択科目	人文・自然科学系科目	歴史資料論	2	3 4	8単位 以上 選択	
		文化人類学 A	2	1 2		
		文化人類学 B	2	1 2		
		歴史学 A	2	1 2		
		歴史学 B	2	1 2		
		環境生物学 A	2	1 2		
		環境生物学 B	2	1 2		
		生命の科学 A	2	1 2		
		生命の科学 B	2	1 2		
		現代科学 A	2	1 2		
		現代科学 B	2	1 2		
		地球科学	2	1 2		
		日本伝統文化論	2	2 3		
世界遺産論	2	2 3				

※1 スポーツ科学部の学生は「生涯学習論」は3年次からでないと履修できません。

高崎市歴史民族資料館訪問報告

メディア情報学部 准教授 間島 貞幸

2023年の夏は異常ともいえる暑い夏だった。その中でも特に暑い日の8月22日（火）、石井香乃さんの博物館実習先である高崎市歴史民族資料館を訪問した。

高崎市歴史民族資料館は、旧群南村役場の建物を利用して、1978(昭和53)年10月1日に開館した。以来、高崎市内を中心に、日々失われつつある民俗資料の収集・保存・研究・展示を行っている。



写真1 (いずれも) 高崎市ホームページより

東京から電車とバスを乗り継ぎおよそ3時間半、高崎市歴史民族資料館に到着した。建物は令和2年8月17日に国登録有形文化財に登録されている。

出迎えてくれた学芸員の大江原 美智子さんにご挨拶し、館内に入ると、「懐かしいなあ、この雰囲気！」と昔通っていた小学校を思い出した。そして石井さんに会った。大学でゼミの時間に会う明るく活発そうな石井さんとは少々様子が異なり、慣れない？スーツを着て緊張気味な石井さんがいた。

訪問したのが実習初日だったため、一緒に実習についての説明を聞いた。大江原さんからは「学芸員の仕事を間近に見て感じて欲しい」と言われたのが印象的であった。その後、石井さんと私は、館内を案内していただいた。館内は新型コロナウイルス等感染症拡大防止のため、マスクをして館内を見てまわった。

それぞれ展示コーナーは、私がまだ子供の頃の昭和の時代にタイムスリップしたかのようでどれも懐かしく感じた。箆笥やテーブル、白黒テレビなど現在と比べると、どれもこじんまりとしていた。石井

さんは、昔の道具に興味津々で、大江原さんに確認しながら一つ一つ実際に手に持ったり、古い机に座ってみたりした。ただ見るだけでなく、実際に触れて、感じることはとても重要だ。

さて、その後の石井さんの実習は実際どのようなものだったのだろうか？大学4年生の石井さんはこの時期、就活を終えてゼミ論文や卒業制作に取り掛かるなど夏休み中ではあるが、とても多忙で充実した毎日を過ごしていた。実習内容は彼女自身のレポートで確認したい。最後に「鍛えがいのある学生なのでご指導のほどよろしくお伝えいたします」と大江原さんにお伝えして高崎市歴史民族資料館を後にした。

訪問時間はわずかであったが、私自身、ゆっくりと流れる空間の中で懐かしいものに触れることができたとても有意義な時間であった。

石井さんの実習にあたり、ご指導いただいた学芸員の大江原 美智子さんをはじめとする高崎市歴史民族資料館の職員の方々に感謝したい。また本学の資格課程ご担当の先生方、事務職員の方々に深く感謝いたします。ありがとうございました。



写真2 高崎市歴史民族資料館で実習をしている石井香乃さん



写真3 昭和時代の生活



写真4 昔の机に座る石井香乃さん

〈総合博物館での実習〉

埼玉県立川の博物館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 神頭 元気

今回7月29日から8月6日のうち7月31日、8月1日を除く7日間埼玉県寄居町にある埼玉県立川の博物館にて博物館実習を行った。

今回の7日間の実習にて実際の収蔵庫へ入っての梱包作業、解説体験などを通して博物館経営の実態や博物館が抱える問題点について理解し、改めて考えるきっかけになった。

1日目はまず朝礼が行われ、7月1日の事前打ち合わせにて知らされていた実習期間全体の予定の説明をしていただいた。説明終了後、川の博物館にて7月8日土曜日から8月31日木曜日まで行われていた企画展「うち・糞・フンⅡ」展の見学を行った。その後、川の博物館が力を入れている小学校等への教育普及事業の紹介を受け、博物館と教育事業との深い関わりについて学んだ。また、令和元年の台風19号襲来による荒川の氾濫に伴う被害の説明をしていただくなど荒川のほとりに建っている川の博物館ならではの問題についても学ぶことができた。初日の最後には各自が持ち寄った皿等を用いて資料調書の制作について学び、2日目の資料調書作成及び資料梱包作業体験にて活かすことができた。

2日目はまず最初に川の博物館の収蔵庫へ入り、収蔵品等の見学及び収蔵庫の清掃を行なった。収蔵庫へ入るといふ普段の日常生活ではあまりできない貴重な体験をさせていただいた他、収蔵庫へ入る際の注意点や博物館収蔵庫ならではの特殊な構造について学ぶことができた。その後博物館に収蔵されている収蔵品を使い調書の作成、梱包を行なった。収蔵品の取り扱い方や記載しなければいけないポイントなどを学んだのち、調書を作成した資料を梱包する作業について学び、座学だけでは学ぶことのできない実践的な点について学ぶことができた。

3日目は昨日の資料調書作成に引き続き、実際の収蔵品を用いて資料梱包のおさらいを行なった。博物館の収蔵品に触れることへの難しさを学ぶと共に、覚えたことを忘れるのではなくブラッシュアップし続けることが大切だと感じた。午後からは博物館に展示されている形状のパネル作成を行った。普段日常では目にする事のない博物館展示ならではのパネル作成は最初は簡単なように思えたが、実際に行ってみると紙のずれや安全管理など、注意しなければいけない点が多く、普段目にする展示パネル一枚一枚にもこのような手間がかかっているだけでなく、パネルの内容作成なども考えるとかなりの工程が必要だということを感じ、博物館学芸員の多忙さを感じた。

4日目はまず菌類学について学んだ。自分はあまり菌類学に触れたことがなく、知識などはなかったが、

そのような自分でも菌類の種類やその違いについてよくわかり、学芸員の方の説明の上手さと顕微鏡などを用いた座学だけではわからない体験の大切さを改めて実感した。午後は川の博物館の館外に出て荒川の流域面積についてのフィールドワークを行った。来館者へ解説する際のポイントや時間配分など気をつけなければいけない点がたくさんあり、とても手間がかかる解説だということがよく分かった。その後、博物館収蔵庫内にて収蔵品帳簿と照らし合わせながら収蔵品の確認を行なった。一点一点行う上できちんと収蔵品が定められた形で定められた場所にあるかなどのチェックを行った。

5日目は川の博物館の横にある荒川に入り実際に生物の捕獲採取や水質調査などを行った。川の博物館が力を入れている教育事業ならではの視点でフィールドワークのポイントを学び、館外活動の意義や大切さを学ぶことができた。午後からは最終日に行った荒川大模型 173 の展示解説を聞き、どのような点に注意し来館者に接するのか等のポイントを学んだ。

6日目は翌日の最終日の発表に向けて、博物館実習生同士でグループを作り、荒川大模型 173 の下見、原稿の作成、パネル作りを進めた。

最終日である7日目は実習の集大成として、今まで学んできたことをもとに、荒川大模型 173 の展示解説発表を行った。どのようにすれば来館者に話を聞いてもらえるかなどをグループで考えながら発表を行い、自分たちのグループの目玉としてクイズ企画を実施し来館者へのステッカーの配布を行うなど無事に発表自体は終わったが、至らぬ点も多々あり今後このような発表する機会があった際の糧にしていきたいと考える。

今回お世話になった羽田武朗さんの講義は大学にて“博物館教育論”として以前学んだ経験があったが、実際に体験してみると講義で行った内容をより深い実態について学べ、本当に様々な体験をすることができた。学芸員の仕事の多様さを実感した2週間だった。また、これらの仕事を知ることが出来て良かったと思った。学芸員実習を受け入れてくださった埼玉県立川の博物館の職員の皆様に心から感謝したい。



荒川でのフィールドワーク



荒川大模型 173 での展示解説発表

私は8月16、17、18、21、22、24、25、26日の8日間、東京都多摩市のパルテノン多摩にて博物館実習を行わせていただきました。

パルテノン多摩は、博物館機能とホール機能を兼ね備えた複合文化施設として設立されました。文化事業としては、音楽や演劇等の公演、ホールをはじめとした施設の貸出などを通して、豊かな文化芸術に気軽に接したり、参加することのできる場所を目指して運営されています。博物館事業としては、多摩地域の地質・地理、歴史、多摩ニュータウン開発を扱った常設展示、企画展示、多摩市植物友の会と連携した植物観察会などの講座事業、植物標本の収集、自動演奏楽器の管理・活用などを行っています。自動演奏楽器について、パルテノン多摩には現在6台の自動演奏楽器があります。これらは開館当初に「音のある街づくり」を目指し購入されたもので、大規模改修時に寄贈などが検討された際には、引き続きパルテノン多摩に置いてほしいという署名活動が行われたほど市民に愛されています。

実習では、常設展示を題材にした解説実習、データベースに登録する資料の調査・撮影、植物標本の採取・制作・整理、自動演奏楽器の実演イベント補助、自動演奏楽器に使用するロール(譜面)の修復作業、実習生による特別展示の企画および展示制作など、様々な業務を行わせていただきました。

なかでも特に印象に残った実習は、解説実習、自動演奏楽器のロール修復、自動演奏楽器実演イベント補助、特別展示の企画・制作です。

解説実習では既に展示されている常設展示の内容から一部分を選択して10分間を目安に解説を作成した後、実際に展示の横に立って解説を行い、内容についての講評をいただきました。私は「多摩ニュータウン建設の経緯」についての展示を選び、1時間程度で解説を作成しました。解説を行ってみて、大きく2点の反省がありました。ひとつは、10分を目指したものの全体的な分量の不足と緊張で早口になってしまった影響で、5分半程度で解説を終えてしまったこと、もうひとつは、解説を聞く利用者を具体的に意識できていなかったことです。特に後者について、私の作成した当時の人々にとってのニュータウン開発の利点を押し出した解説に対して、講評の際に「当時集落から退去を要求されたなど、必ずしも開発にポジティブなイメージを持つ利用者だけがいらっしゃるわけではない」と指摘していただき、自分の中のイメージを先行させた解説を作ってしまったことに気づくことができました。展示にはメッセージが含まれますが、複数の立場が存在する場合にはどちらかに偏ったメッセージになってしまうように気をつける必要があると改めて意識しました。

ロール(譜面)修復作業では、自動演奏楽器が制作された当時のオリジナルロールの破損部分をメンディングテープを用いて修復していきました。非常に繊細な作業で緊張しましたが、きちんと修復することができました。過去の実習生が少しずつ修復してきたロールを引き継いで修復を行っており、この作業によってクナーベ・アンピコという自動演奏楽器のドヴォルザーク「新世界より 第3楽章」のロールがすべて修復出来たため、実演イベントにて実際に演奏を行えることになりました。

自動演奏楽器の実演補助では、実習期間中2回の実演のイベントにて、椅子出しや利用者の方の誘導、アンケート協力をお願いなどを行いました。また、2回目のイベントの際は自動演奏楽器の操作も任せ

ていただきました。私はクナーベ・アンピコの操作を担当したため、修復が終了した「新世界より 第3楽章」の演奏も行わせていただくことができました。実際に流してみるまで曲が流れるか不安でしたが、最後まで問題なく演奏することができてとても嬉しく、また多くの実習生が長い間かけて修復してきたロールを完成させることができてとても光栄に思いました。

実習生特別展示の企画・制作では、5日目から8日目の4日間をかけて、実習生3人で「多摩とヤマバト」というタイトルの展示を制作しました。企画の提案、資料調査、解説パネルの作成など、一から展示を作り上げる非常に貴重な体験をさせていただきました。

なかでも難しかったのは企画の内容検討です。最初の段階では「多摩と動物」というタイトルで多摩地域に生息する動物全般をテーマにした子供向けの展示としていたため、パルテノン多摩で過去行われた企画展示と類似している、資料の調査範囲が広範に渡ってしまう、展示全体を通したメッセージの構築が難しいといった問題点が見つかり、実習生で話し合い内容を変更することになりました。特に、特別展示は子供向けの展示内容にしたいと決めていたため、文章の難しさについては常に意識していく必要があり、悩むことが多くありました。

「多摩とヤマバト」の展示は大きく3章に内容を分け、実習生1名につき1章分を担当するかたちで制作していきました。私は多摩市とヤマバトの地域的な結び付きとして、市鳥として選ばれる、公共施設の愛称として用いられるなどの事例を取り上げた解説のパネルを制作しました。また、収蔵資料から数点を実際にケース内に配置し、展示する作業も行わせていただきました。

展示制作全体を通して、言葉を扱うことの難しさを強く感じました。些細な表現の変化や、言葉の順番を入れ替えたことによって読んだ時のイメージが大きく変わってしまうことが多くあり、正しく知識やメッセージを伝えるためには慎重に文章を構築する必要があると実感を伴って学ぶことができました。

最後になりますが、通常の業務があるなかで実習を受け入れて、貴重な経験の場を設けてくださったパルテノン多摩職員の皆様に改めて感謝を申し上げます。



自動演奏楽器の実演補助の様子



完成した実習生特別展示

〈歴史博物館での実習〉

古代オリエント博物館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 井上 実波

私は、古代オリエント博物館で5日間の実習をさせていただいた。古代オリエント博物館は、日本初の古代オリエントをテーマとした博物館で1978（昭和53年）に開館した。古代オリエントに関する調査研究を行うと共に、古代オリエントに関する資料を収集、保管、展示している。研究者の利用に供し、学術文化の向上発展に寄与することを目的としている。

実習初日は、ポジフィルムの清掃とスキャン作業を行った。ポジフィルムは研究員の方が30年前くらいに海外に行った時の写真である。そのため照明にかざしてポジフィルムを見てみると、カビやホコリなどの汚れが目立っていた。ポジフィルムをデジタルアーカイブ化するためのスキャン作業を行う片手間に、ポジフィルムの清掃作業を行った。ポジフィルムのデジタル化は、フィルムホルダーにフィルムを入れてスキャンを行う。最大8つフィルムをセットすることができ、8つ一気にスキャンを行うのに5～6分かかる。その間にポジフィルムの清掃を行う。清掃する際は「ブロワー」を使ってフィルムについたホコリを飛ばし「キムワイプ」をちぎって綿棒に巻き付ける。巻き付けたところに消毒用のアルコールを染み込ませて清掃を行う。清掃する際には、フィルムに指紋がつかないように慎重に行う。綿棒がすぐ黒くなったので、よほど汚れていたのだと思った。キムワイプは無駄使いしないよう縦にちぎって、いくつか分けてから使用する。アルコールもつけすぎると逆にフィルムに跡がついてしまうため気を付けて作業をした。特に海や空の写真などはスキャンしたのを見ると汚れが浮いて目立っていたので、念入りに清掃を行わなければいけないと反省した。撮影した当時の写真をそのまま残すのはとても大事な作業だと改めて思った。

2日目は来館者の方が書いたワークシート「お気に入りシート」の回収と差し替え作業を行った。「お気に入りシート」は、館内に展示されている多くの展示品の中で、来館者が気に入った展示品の名前と絵、コメントが書かれているものである。そのお気に入りシートは館内に掲示されており、来館者の方たちが貼りやすい位置から貼っていくため、真ん中のものを回収し、下のものを真ん中に貼るよう差し替えを行った。両面テープで貼られており、回収する際は両面テープをくっつけて回収を行った。回収したお気に入りシートはポジフィルムと同じようにデジタル化をするため、両面テープを剥がすのだが、剥がす際は紙が破れないよう慎重に行った。テープを剥がしたら、コピー機を使ってお気に入りシートのスキャンをした。スキャンされたデータはパソコンに転送され「ファイルメーカー」を使って、お気に入りシートのイラストを切り取り、展示物の名称と来館者のコメントを打ち込みデジタル作業を行った。中には展示物の名前とコメントが書かれておらず、イラストだけ描かれていたものがあった。イラストだけでは名称が分からないため、職員の方に尋ねて解決した。秋の特別展「おまもりとハンコとコイン」開催していたが、特別展が数日で終了してしまうので館内の見学をする機会をいただけた。ハエやヘビなど現代では考えられない生物が昔はおまもりとされていたことが興味深かった。

3日目は実習生が一人加わり、私と2人で作業を行うことになった。不要となった本や雑誌、段ボー

ルを紐で縛る作業をした。段ボールのサイズがばらばらで結ぶのに苦労した。特別展が終了したので、2人で見学をした。「スタンプ印章」という展示物が多くあり、動物や人間などが描かれていて、当時の時代背景を物語っているのかと考えさせられた。その後、本をいくつか図書室に戻し、本が番号の通りに並んでいるか、順番通りに並んでいるかなど確認をした。順番通りに並んでいたため、並び替え作業はなかった。そして初日と同様、ポジフィルムの清掃とスキャン作業を行った。清掃する際はフィルムをこまめに照明に照らして汚れがないか確認しながら行った。昔の写真をデジタル化することで、現代に残していけるのはとても良いことだと思った。

4日目は特別展の片付け作業を行った。まず掲示されているお気に入りシートを全部回収する作業をした。上の方に掲示されているものは届かないため脚立を使い、一人が上って一人が脚立を支えた。回収し終えたら、両面テープを剥がす作業を行った。その後「子どもパネル」の差し替えを行った。「子どもパネル」は子どもと職員の方のイラストが描かれており、会話形式で非常に分かりやすく解説が書かれているパネルのことである。紙にしわが寄ったり、破れていたりするものを新しい用紙に差し替えた。パネルがネジで留められているものはドライバーを使って外し差し替えるのだが、綺麗に用紙をパネルに差し込むのが難しかった。特別展の展示物のパネルを回収し違うパネルを取り付ける作業を行った。これは2人で分担して行う。1人が展示ケースの中に入り、パネルをフックに引っ掛け取り付ける。もう1人はパネルが真っ直ぐになっているか確認し、傾いていたならその都度指示する。曲がっていたらワイヤーの紐を調節し、協力し合いながら作業をした。ワイヤーの紐がそもそも合っていないものもあり、調節が難しかった。また作品の解説シートは画鋏で留まっていたため、外すのに苦労した。展示ケースの中に入りガムテープで中のごみを取っていった。展示ケースとガラスの細かい隙間に虫の死骸らしきものがあって、職員の方に相談しないでガムテープで取ってしまい、事後報告になってしまったので今度虫がいたら写真を撮るようにと指示を受けた。自己判断しないよう気を付けたいと思った。

5日目は、特別展の資料を保管ケースに戻す作業を行った。資料を触る前によく手を洗い、ケースに綿や紙を敷き詰め資料を床に落とさぬよう慎重に作業をした。戻す際はケースに書かれた番号と展示物に書かれた番号を照らし合わせながら戻す。中には展示物に番号が振られていないものや、ケースに書かれたイラストと一致するのに番号が一致しないものがあった。そういったものは新しく番号を振り貼り付ける作業を行った。資料は動物の護符やおまもりといった小さいものが多かったので、シールに番号を書く際も非常に小さく書かなければならないため、シールを貼るだけなのに難しい作業だと思った。展示資料を見て作られた当時はどんな意味があって、作ったのだろうかと思いが湧いた。こんなに小さな資料が現代まで残っていて、それを発見して展示できる博物館って素晴らしい場所なのだなど改めて実感した。

最後になりましたが、実際に職員の方たちの業務に携わることができ、とても貴重な体験をすることができました。5日間の実習で学んだことを忘れずに、今後の生活に活かしていきたいと思います。お忙しい中、実習を受け入れて下さった館長をはじめ、職員の方々に深くお礼申し上げます。



フィルムの清掃とスキャン作業の様子



パネル差し替え作業の様子

高崎市歴史民俗資料館

メディア情報学部メディア情報学科 4年 石井 香乃

私は2023年8月22日から8月27日の6日間、高崎市歴史民俗資料館にて実習させていただいた。高崎市歴史民俗資料館は、旧群南村役場の建物を利用して、昭和53年10月1日に開館した。以来、高崎市を中心、日々失われつつある民俗資料の収集・保存・研究・展示を行っている。

実習させていただいた6日間では、企画展の準備の手伝いなどを主に行なった。

実習初日は、1日の流れを見つつ、施設の見学とチラシの発注を行った。施設の見学は、展示品や館の特徴を説明していただいた。展示において“比べること”と“高崎市の特徴を伝えること”の2点に気をつけているように感じた。来館者の方が、今と昔を比べられるような展示があったり、高崎といえば〇〇といった展示があったり、こだわりを感じた。チラシの発注は、秋から始まる企画展のチラシ作りのため、内容やページ数、大きさのミーティングを業者と行なっていた。秋の企画展は、子供向けなので、それに合わせたデザインにするそうだ。以前のチラシは、図録やポスターとしても使えるようにするなど、工夫して作っているそうだ。

2日目は、学校見学の打ち合わせと企画展について話を伺った。学校見学の下見にいらっしゃった先生方との当日の打ち合わせを見学させていただいた。担当している職員さんが元々教員であるということもあり、生徒のことを考えた見学の仕方と提案したり、普段の授業に対してのアドバイスを行ったりしていた。それに対して先生方も深く頷き、「楽しかった」とおっしゃっていた。より良い関係を作ることも学校見学を行う上で大切なことであると思った。これから行う秋の企画展は、“昔の単位”がテーマである。その展示の仕方についてお話を伺った。目でわかる、持つて感じる展示にすることを大切にしており、一升枥10個と一斗枥1個を並べたり、ペットボトルで重さを体感しと貫う展示にするそうだ。

3日目は、パネルの文章の作成を行なった。この日は、“ものさし”を題材にした。限られた文字数の中で、伝えるべき情報を誰に発信するのかを突き詰めていくことが大切であると感じた。また、文章だけでなく、文字の向きやフォントなどのレイアウトにも意味を持って作成していることがすごいなと感じた。

4日目は、パネル作りを教えていただいたり、市役所訪問に同行させていただいたりした。初めてパネル作りを行ったが、カッターを斜めに入れることで正面から切断面が見えないようにする工夫がされていることを知った。今回、私は数個小さいものを用意してくださった材料で作ったが、展示の場合は、数百個と作るので個数を予想し、事前に準備しておくそう。一つのパネルを作るのに多くの努力が必要であることを知った。また、資料館は、市営なので週に2回ほど市役所を訪問する。主に、書類の受け渡しを行なっているそう。“市の職員である”という気持ちを持って、日々の業務を行っているそう。

5日目は、学芸員の業務や資料館の変化についてお話を伺った。ラジオ番組の出演や講演会も行っており、その台本や資料の作成も業務に含まれている。また、時代の変化に合わせて男女兼用のトイレを設置されたり、男性トイレにサンタリーボックスを置いたりしているそう。様々な人が利用できる施設だからこそ、社会問題にも目を向けて変化していく必要があると感じた。

6日目は、企画展の展示準備と企画展のポスターの送付準備を行なった。企画展で展示する枡の中に緩衝材を入れる作業を行なった。緩衝材は、以前、繭に見立てて展示を行ったものを使うそう。以前使ったものでも利用できるものは生かして展示することも必要だと思った。また、県内の資料館や博物館などに企画展のポスターを送るため、封筒に宛先のシールを貼り、宛名の印刷を行なった。

今回の6日間の実習を通して、学芸員の活動や心構えを学ぶことができ、学校の講義では学ぶことのできない学芸員の“リアル”を感じることができた。

最後に、多用の中で実習を受け入れてくださった高崎市歴史民俗資料館の方々に改めて感謝の意を伝えたい。



企画展で展示される枡



展示の見学

私は、2023年7月26日から8月10日までの休みを除いた10日間を東京都東村山市諏訪町にある東村山ふるさと歴史館及び、東村山市野口町にある八国山たいけんの里で博物館実習をさせていただいた。東村山市は古代の「東山道」、中世の「鎌倉街道」を軸に特徴ある歴史がある。これらを反映した文化財が残されている。東村山市ふるさと歴史館は文化財保護や歴史資料の収集をしており、東村山の歴史に関わる展示を開催している。また、八国山たいけんの里では、「人と自然のカンケイ」をテーマにしており、自然や考古、伝統文化やアートアンドクラフトなど様々な体験イベントを行っている。

実習初日は、午前中には2つのことをした。1つ目は館内案内をしていただいた。館内案内では、東村山ふるさと歴史館の常設展示の解説、それから職員の方しか入ることができない場所を案内していただいた。常設展示の解説では、知らないことがたくさんあり、新たな発見ができすごくワクワクした。ずっと東村山に住んでいるが、昔ザリガニ釣りをしていた場所が遺跡だったということに一番驚いた。2つ目は、れきしかん夏まつりのプレゼンテーションだ。これはふるさと歴史館が行っている市民に向けてのお祭りだ。このお祭りに実習生が1コーナー作り上げるというものだった。このコーナーの内容をひとりひとり考えてきて、プレゼンテーションをした。初日ということもあり、すごく緊張したが、発表を終えることができた。午後もこの続きの話し合いを行った。みんなで意見を出し合い、無事に出し物を決めることができた。

2日～4日まではれきしかん夏祭りの準備を行った。私たちは文化財を絡めた輪投げを出し物として行うことになった。輪投げで入った的に書いてある文化財のカードを集め、地図を完成させるというゲームだ。私の担当は景品だったので2日間はひたすら景品を作成していた。景品の作成が終わったら、どんな地図にするか、表紙の絵はどうするかなど、細かいことを相談しながら決めた。輪投げも小さい子には的が高すぎるなどを考えながら試行錯誤をし、協力をして進めた。準備期間が3日もなかったのですが、無事に全てを作り上げることができた。

5日目、れきしかん夏まつり本番。当日の当番としては、午前が輪投げ担当、午後が射的担当だった。午前の輪投げ担当では、輪投げを渡す係や、カードを貼る係などを行った。想像以上にたくさんの子どもが来てくれた。自分が思っているよりも体力が必要な出し物だった。何回も輪投げに挑戦してくれる子どもは文化財を名前と呼んでいたりして、少しは学べる場になったのかなと思った。午後の射的では、ハンコをカードに押ししたり、輪ゴムを回収したりする仕事を行った。少し緊張していたが、子どもがたくさん私に話しかけてくれたおかげで楽しく行うことができた。職員の方も輪投げが大賑わいだったと言ってくれることができ大成功した。

6日目。夏祭りも終わり、いよいよ専門実習に入る日だった。午前中は古文書についての専門実習を行った。まずは古文書の整理を行い、日付が明確に分かっていないものはここに並べるなど、整理する順序を学んだ。あとはマイクロフィルムを空気に触れさせ巻直す作業を行った。機械もあるけれど主に手作業で行うということを知ってすごく驚いた。とても大変な作業だった。午後は考古学について学んだ。粘土を使い、縄文ペンダントを作成した。

7日目は、午前、午後ともに古文書について学んだ。主に古文書のクリーニングを行った。古い紙のものが多かったので、破損しないように注意しながら作業を進めた。すごい量の古文書があったため、これもふたりで1枚1枚手作業をして行っていることを知り、とても大変な作業だと知ることができた。

8日目は、民俗学を学んだ。近くの小学校に収蔵されている資料を全て出す作業を行なった。普段、展示されているものなどを持ち上げて触れることはないことなので貴重な体験をした。少し劣化しているものもあったので気をつけながら運ぶことを意識した。他には、収蔵されている民具などの使用方法などを学んだ。郵便局の自転車があり、昔の映画などで見るものだなと感激を受けた。

9日目は考古学で麻の皮剥ぎ体験とアンギン編みを体験した。麻の皮剥をした際、すごく独特な匂いを感じた。実際に皮を剥ぐ際、うまく揃ってくれなくてなかなか難しかった。このはいだ皮を繊維だけにする作業もおこなった。皮がうまく揃って剥げなかったため、繊維だけにする作業も大変だった。アンギン編みでは木の機械のようなものを使い編み物をした。最初は難しかったが、コツを掴むとスルスルできた。縄文時代の人々は、苦勞して服を作っていたのだなと身をもって体験することができた。

最終日は展示説明を行った。2時間資料を集める時間があり、それが終わったら1回目の発表をした。その評価を受け、再度午後には発表を行なった。1回目の発表では、原稿を見て下を向いているとご指摘をいただいた。2回目は少し余裕も出て、展示物を差しながら前を向いて発表することができた。聞きやすかったと褒めていただくことができ嬉しかった。

最後に、短い期間ではあったがとても濃い10日間を過ごすことができた。来館者では知ることができない大変さも学ぶことができた。こうした実習をさせていただいたことに感謝しながら今後役に立てていきたいと思う。



麻の繊維取り



古文書 クリーニング

私は、2023年7月1日と7月29日から8月8日までの休館日を除いた計10日間、埼玉県毛呂山町にある毛呂山町歴史民俗資料館で博物館実習をさせていただきました。毛呂山町歴史民俗資料館は、毛呂山町の考古・歴史・民族に関する資料を収集・調査・研究・保存し、地域の方々に向けて展示を行っています。常設展示室では「山の里 歴史と文化」をテーマに、原始・古代・中世・近世・民族の5分野に分かれた展示を行い、特別展示室では特別展や企画展など、年に数回展示を行っています。私が実習をさせていただいた期間には、夏休み展として地域の子どもの自由研究を手助けをすることを目的とした展示が行われていました。また教育普及活動として、地域の方々に向けた様々な体験会が行われており、地域と強く密接した博物館運営が行われています。

今回参加させていただいた実習では、体験会の補助、資料の取り扱い、文化財の点検、古文書の整理、資料の梱包、展示の作成を行わせていただきました。

実習1日目は、実習のオリエンテーションと体験会に向けての事前体験を行いました。実習期間内に行われる2つのイベントを体験させていただきました。自分が体験してみることで体験会に来られた方がどのようなことで困る可能性があるのか、自分たちがどのような動きをすればそれを解消できるのかなどを実感することができました。

実習2日目は「勾玉作りと古墳巡り」の体験会の補助と資料の写真撮影を行いました。また実習8日目は、藍染めの体験会の補助を行いました。体験会ではサポーターの方々と協力しながら参加者へのアドバイスや声掛けを行いました。体験会へは小学生と保護者で一緒に参加される方が多くいました。事前体験での経験を活かし、落ち着いてサポートを行うことができました。作業の時間があつたため、小さいお子さんでは飽きてしまう子が多く、興味を持ったまま最後まで長く楽しんでいただくことの難しさを実感しました。資料の写真撮影では、撮影方法と機材について教えていただきました。カメラ自体の設定やライトの当て方などで移り具合が大きく変わってしまったので、資料のどの要素をとらえて撮影を行うべきか、一つ一つ考え、実践していく中で学んでいくことが大切であると感じました。

実習3日目は、資料の取り扱いを教えていただきました。資料館にある屏風と掛け軸をお借りして、展示をする際の取り扱い方法や保存方法の注意点などを教えていただきました。また地域の方に資料を寄贈・寄託していただくこともあるため、寄贈者・寄託者の方との関わり方や信頼関係の築き方なども教えていただきました。資料を取り扱うこと以外にも大切にしなければいけないことがあると学ぶことができました。

実習4日目は、毛呂山町内に数多くある文化財の点検・清掃を行いました。時間内にすべての文化財を回ることはできませんでしたが、それぞれの文化財ごとに周辺の様子や案内板の状況、資料の状態などが異なっていました。これらの文化財は外にあるため、天候の影響などを直接受けてしまい、長く保存することが収蔵可能な資料と比べてとても困難です。そのような重要な文化財を長く保存し、未来に残すためにも定期的な点検や状態の確認などが大切であると感じました。

実習5日目は、古文書の整理を行いました。多くある資料を一つ一つ表と照らし合わせて判別し、対

応した封筒に入れるという作業は大変でしたが、毛呂山町に関する多くの資料に触れることができた貴重な機会であったと思います。資料を保存・管理するために必須となるこの作業は多くの時間と労力がかかる、けれどとても大切でやりがいのある仕事であると感じました。

実習6日目は、梱包の方法を教えてくださいました。保存のために梱包をする必要がある資料をお借りして、ふとん作りから梱包まで実際に行いました。できるだけ資料の凹凸がなくすこと、再び開ける際のことを考えて梱包することなどアドバイスをいただきながら梱包を行いました。実際にやってみるとしっかり包もうとしてむしろ資料に圧をかけてしまいそうになったり、ふとんを作る際に目算を誤ったりと至らない点が多々あったので、数をこなして経験を積んでいくことがとても大切であると実感しました。

実習7日目から10日目は、今回の実習の目標である「展示の作成」に向けての作業を行いました。他大学の実習生と話し合いを行いながら協力して作業を進めました。どのような展示にするのか、その展示で何を伝えたいのか、どのような資料が必要か、どのように資料を配置にするかなど、考えなければならない点が多く、順調に進めることができなかつたため、自分の経験不足を痛感しました。複数人いることで意見がぶつかってしまうこともありましたが、一つの視点にとらわれにくく、また様々な意見を取り入れることができ、よりよい展示作成につながるというメリットもあるのだと実感しました。展示完成後に講評をいただき、資料の展示の流れのわかりづらさや説明文の読みづらさなどを客観的な視点から改善点を教えてくださいました。作成していく中で気づくことのできなかつた点が本当に多くありました。実際に自分で展示を作ってみることで見る人の視点から展示を作ることの難しさを学ばせていただき、学芸員の方々の凄さを改めて実感しました。

10日間の実習の中で、今まで経験したことのない本当に多くのことを体験し、学ばせていただきました。資料館で行われている業務に参加させていただいて、学芸員の仕事は資料と向き合うだけでなく、多くの人と関わり、支えあって行われるものであると強く感じることができました。今回の実習で学ばせていただいたことは、学芸員としてだけでなく、様々な場面で活かすことができることだと思うので、今後役に立てていくためこれからも努力していきます。

最後になりますが、お忙しい中、実習を受け入れてくださった毛呂山町歴史民俗資料館の皆様へ、心より感謝申し上げます。本当にありがとうございました。



藍染め体験の様子



作成した展示

〈郷土博物館での実習〉

飯能市立博物館

心理学部心理学科 4年 堀越 美羽

私は8月2日から8月9日までの月曜日を除く7日間、飯能市立博物館で実習をさせていただいた。実習生は私を含めて3人いた。飯能市立博物館は、1990年に飯能市立郷土館という名称で開館し、2018年に歴史だけでなく飯能市の自然も取り入れたビジターセンター的機能を持つ博物館にリニューアルした。常設展示では、飯能の里・町・山のコーナーに分かれた歴史展示室が置かれ、西川材を使った飯能と西川材コーナー、飯能河原や天覧山、多峯主山の自然に着目した自然コーナーがあり、これら3種類の展示を中心に飯能地域における歴史博物館の役割とビジターセンターとしての役割を担っている。特別展示では「写真でたどる飯能市の70年」という展示を行っており、そこで使用されていた写真は市民からいただいたり、借りたりしたもので、市民と博物館の信頼関係が感じられた。

実習初日は、施設管理とIPMについて学んだ。飯能市立博物館が行っている館内環境のモニタリングと対応について温湿度と生物に重きをおいて教えていただいた。他の博物館と飯能市立博物館を比べながらどのようにして資料を保存しているのか、その時に注意していることは何なのかを聞いた。その後、実際に展示室と収蔵庫を見学させていただいた。常設展示の課題や今後していきたいこと、収蔵庫ではどのように資料を保存し新たに受け入れていくかなど、理解を深めながら見聞きすることができた。

実習2日目は、夏休み子ども自然教室の事前調査・準備、3日目はその補助を行った。2日目の調査と準備では実際に飯能河原まで行き、翌日はどのような経路でどのようなことを子どもたちに体験させるか考えた。川は連日の猛暑で干上がってしまっており、昨年までの経路では無理だという判断が出された。また、川に入って何の生き物が取れるのかも調査した。この猛暑で自然教室は上手くいくのだろうか、子どもたちが安全に楽しめるようにしなければという不安と責任を抱えて当日を迎えた。当日の3日目、子どもたちはもちろん自分自身が熱中症にならないようにこまめに水分を取りながら運営の補助を行った。子どもたちが遠くに行かないように注意しながら見たり、一緒に生き物を探して取る手伝いをしたりした。午後は自然教室の反省会を行った。上手くいったこと、もっとこうの方が良かったと思ったところ、改善点などを上げていった。他の人の意見も聞くことで見えていなかったところがわかり勉強になった。

実習4日目は、来館者用展示ワークシート作成を行った。内容としては、小学生を対象としたワークシートを常時展示室に設置するため、里・町・山に分かれてクイズ形式で学べるものを作成してほしいということだった。私は「里」を担当し、原始の暮らしについてのクイズを2問考えた。最初は表に1問目、裏に2問目を作成しようとしたが、職員の方から「表に問題、裏に解答を載せた方が見やすいかもよ」というアドバイスをいただいた。他にも、小学生が対象なため漢字には全てふりがなを振ったり、わかりにくい言葉は使わないようにしたりと工夫して作成していった。できたものは後日職員の皆さまが確認してくださり多くの案をいただいた。

実習5日目は、土器資料の撮影の手伝いを行った。撮影するまでに照明の角度や光の調整、カメラのセッ

トなどを行い、資料ひとつの撮影だけでもとても時間がかかることがわかった。特に光の調整が難しく、照明を資料から離したり近づけたり、トレーシングペーパーを使用して光を弱めたりして調整した。撮影後も暗くなっているところはないだろうか、ボケているところはないだろうかなどの確認をした。15種類の縄文土器を撮影したが撮影に参加できたことはとても貴重な体験だったなと思った。

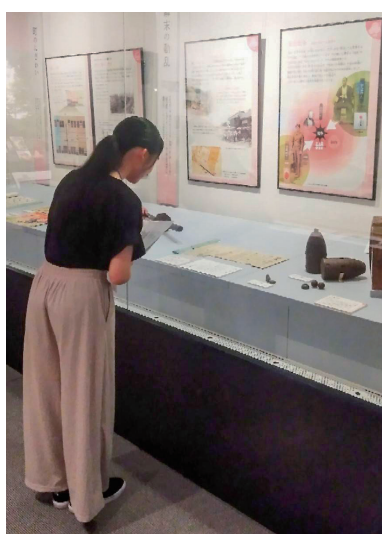
実習6日目は、古文書の整理を行った。昨年大学の授業でも扱った資料もあったが、それはコピーだったため本物を扱えるのは良い経験だった。主に明治時代の古文書を整理したが、読める文字が少なく何が書かれているのかわからなかった。しかし、尾崎館長からヒントを貰いながら徐々に読めるようになり、内容が理解できた時はとても嬉しく楽しかった。また、扱った古文書のほとんどは最近博物館にきたものだったが、虫食いがあり紙ボロボロしてしまっていた。そのため、博物館のように保存場所がない環境での紙の保存は難しいのだと痛感した。

実習7日目は、午前中に夏休み子ども歴史教室「めざせ！縄文土器はかせ」の補助を行った。縄文土器は丁寧に扱わなければ簡単に壊れてしまうということで、子どもたちに教える時は注意した。これを企画した職員の方が縄文土器にどうやって興味を持ってもらうか、飽きさせない工夫などを考え心配していたが、子どもたちが楽しそうに取り組んでくれたため良かったなと思った。縄文土器は思ったよりも大きかったため子どもが持ち上げる時に手伝ったり、積極的に声を掛けて考えていることや感じたことを共有したりした。

午後からは、尾崎館長の講話と7日間のまとめを行った。博物館の評価方法や展示の見方、広報について話し合った。博物館は今後どうなっていくべきなのか、若い世代からも利用してもらうにはどのような取り組みが必要なのかを考えた。他の実習生の意見や尾崎館長の考えを聞いたのは貴重だと思った。

この7日間の博物館実習では多くのことを学び、体験することができた。実際に目で見て触れることで大学の授業の中ではわかりにくかったことを理解することができ、とても充実した実習期間を過ごすことができた。ここで学んだことは忘れずに将来に生かしていきたいと思う。

最後に、お忙しい中、実習を受け入れてくださった博物館職員の皆さまに感謝申し上げます。



歴史展示室見学の様子



歴史教室での様子

=資料=

博物館実習協力館および受入人数一覧（過去3年間）

【2021年度】

No.	所在	館種	2021年度実習協力館	実習人数
1	栃木	総合	栃木県立博物館	1
2	埼玉	理工	さいたま市青少年宇宙科学館	1
3	埼玉	歴史	埼玉県立歴史と民族の博物館	1
4	静岡	歴史	富士山かぐや姫ミュージアム	1
5	東京	歴史	古代オリエント博物館	1
6	埼玉	総合	入間市博物館 ALIT	1
7	埼玉	郷土	飯能市立博物館	2
8	埼玉	総合	狭山市立博物館	1
9	栃木	理工	栃木県子ども総合科学館	1

【2022年度】

No.	所在	館種	2022年度実習協力館	実習人数
1	埼玉	総合	入間市博物館 ALIT	1
2	埼玉	総合	埼玉県立川の博物館	2
3	埼玉	総合	狭山市立博物館	1
4	埼玉	歴史	東村山ふるさと歴史館	1
5	埼玉	郷土	飯能市立博物館	2
6	埼玉	郷土	草加市立歴史民俗資料館	1

【2023年度】

No.	所在	館種	2023年度実習協力館	実習人数
1	埼玉	総合	埼玉県立川の博物館	1
2	東京	総合	パルテノン多摩	1
3	東京	歴史	古代オリエント博物館	1
4	群馬	歴史	高崎市歴史民俗資料館	1
5	東京	歴史	東村山ふるさと歴史館／八国山たいけんの里	1
6	埼玉	歴史	毛呂山町歴史民俗資料館	1
7	埼玉	郷土	飯能市立博物館	1

2023年度 資格課程修了者

[司書課程]

法学部

法律学科

齋藤 大夢

メディア情報学部

メディア情報学科

井上 実波

岡庭 レイ

倉茂 咲弥

小林 紗也香

高田 裕太郎

鷹啄 由起子

鶴田 涼也

本橋 優希

心理学部

心理学科

井上 実英

藤森 悠衣

久保田 彩花

今井 遥斗

他 8 名

計 21 名

[学芸員課程]

メディア情報学部

メディア情報学科

石井 香乃

井上 実波

岡庭 レイ

神頭 元気

武澤 夢来

心理学部

心理学科

藤森 悠衣

堀越 美羽

計 7 名

司書課程科目担当教員一覧（2023年度）

《専任》

【教員名】	【担当科目】
青野 正太	図書館情報学／図書館制度・経営論／情報サービス論
石川 賀一	生涯学習論／図書館サービス概論／情報資源組織論／情報資源組織演習Ⅰ／ 情報資源組織演習Ⅱ
岩熊 史朗	コミュニケーション論
狐塚 賢一郎	生涯学習論
寺嶋 秀美	情報処理概論

《非常勤講師》

【教員名】	【担当科目】
入矢 玲子	情報サービス演習Ⅰ（基礎）／情報サービス演習Ⅱ（発展）
清野 愛子	児童サービス論
杉本 ゆか	図書館情報技術論／図書館情報資源概論／図書館総合演習
杉山 正司	生涯学習論
野村 正弘	デジタル・アーカイブズ論
邊見 統	歴史資料論

学芸員課程科目担当教員一覧（2023年度）

《専任》

【教員名】	【担当科目】
石川 賀一	生涯学習論
伊藤 雅道	環境生物学Ⅰ／環境生物学Ⅱ／生命の科学Ⅰ／生命の科学Ⅱ
海老澤 豊	歴史学Ⅱ
大森 一宏	経済史Ⅰ／経済史Ⅱ
岡田 安芸子	日本文化論Ⅰ
木塚 隆志	西洋文化史
黒田 基樹	歴史学Ⅰ／法史学
狐塚 賢一郎	生涯学習論
船場 ひさお	音響メディア論
竹内 俊彦	マルチメディア論
寺嶋 秀美	ネットワーク構築論
野村 正弘	デジタル・アーカイブズ論
長谷 憲一郎	映像メディア論
福島 大我	歴史学Ⅱ
増田 珠子	歴史学Ⅰ
村上 大輔	文化人類学Ⅰ／文化人類学Ⅱ
村越 一哲	アーカイブズ学
本池 巧	現代自然科学Ⅰ／現代自然科学Ⅱ

《非常勤講師》

【教員名】	【担当科目】
枝川 明敬	博物館経営論
尾崎 泰弘	博物館資料論
白石 行広	データベース設計論
杉山 正司	生涯学習論／博物館概論／博物館資料保存論／博物館情報・メディア論／ 博物館実習Ⅰ／博物館実習Ⅱ
丹治 清	博物館展示論
羽田 武朗	博物館教育論
邊見 統	歴史資料論

駿河台大学 資格課程 年報 第 23 号

発行日 2024年4月30日

発行 駿河台大学 資格課程

〒357-8555

埼玉県飯能市阿須698番地

TEL 042-972-1110



駿河台大学
SURUGADAI UNIVERSITY